

江戸遺跡研究会第100回例会は、2005年5月18日(水)午後6時30分より江戸東京博物館学習室にて行われ、金子智氏より、以下の内容が報告されました。

千代田区丸の内一丁目遺跡の調査 - 江戸城外堀石垣を中心に -

金子 智

(千代田区立四番町歴史民俗資料館)

1. 遺跡の位置と地形

丸の内一丁目遺跡は、千代田区丸の内一丁目1番に位置する。現在東京駅八重洲南口至近に位置するこの地域は、江戸城の正面側(大手側)にあたり、第二次大戦直後までは南北に江戸城外堀が走っていた。

地形的には、中世以前まで江戸湾に張り出していたといわれる半島状の砂州「江戸前島」上に位置し、低地ではあるものの、極端な湧水を伴う地域ではない。近世盛土の下方は、上から灰色の粘土層(古代~中世?)、堅く締まった青灰色のシルト層(上部に生痕を有し、いわゆる「東京層」の上部と考えられる)、粗砂層の順となり、いわゆる「有楽町層」と呼ばれる縄文海進期の混貝層は失われていた。ちなみに最下部の砂層は、近隣のボーリングデータによれば、下方にさらに10m以上続き、更新世の堆積物と判断される。

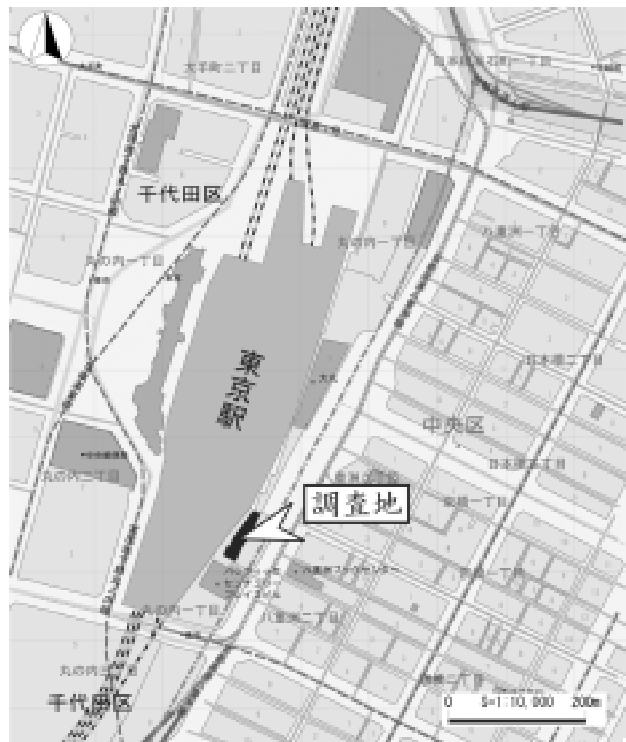


図1 遺跡の位置

2. 調査年月

調査は、2004年4月~7月にかけて現地作業を行った。今回の調査は本遺跡の第2次調査にあたり、平成8年から

行った調査については、丸の内1-40遺跡調査会1998『丸の内一丁目遺跡』として報告されている。今次調査報告書については、8月刊行を目指し現在印刷中である。

3. 調査の概要

(1) 遺跡の概要

本遺跡は、江戸城外堀石垣を中心とする遺跡である。第1次調査では寛永13年(1636)修築の石垣が発見されており、今回はその北隣を調査したものである。このほか今回の調査では、石垣後方・下方から先行する外堀と思われる遺構が発見されている

(2) 周辺の沿革

江戸城外堀に架かる「鍛冶橋」を渡った、有力大名の上屋敷が軒を連ねた「大名小路」のはずれに位置する。今回の調査地は、武家地と町屋とを隔てる外堀の、武家地側(江戸城内郭側)の石垣の一部にあたる。調査地は外堀の壁面と外堀内であり、武家地など居住区域にはかかっていない。石垣は明治40年代まで近世の形のまま残っていたが、鉄道延伸にともなう改修により当初の石垣は撤去された。堀自体は昭和20年代まで残ったが、戦後埋め立てられて現在はその姿をとどめていない。

(3) 主な検出遺構

主な遺構は以下の3つである。いずれも江戸城外堀に関連するものとみられる。

江戸城外堀石垣(01号遺構)

石垣以前の外堀跡(旧外堀、03号遺構)

外堀斜面に構築された土坑列(04~06号、11~16号遺構)

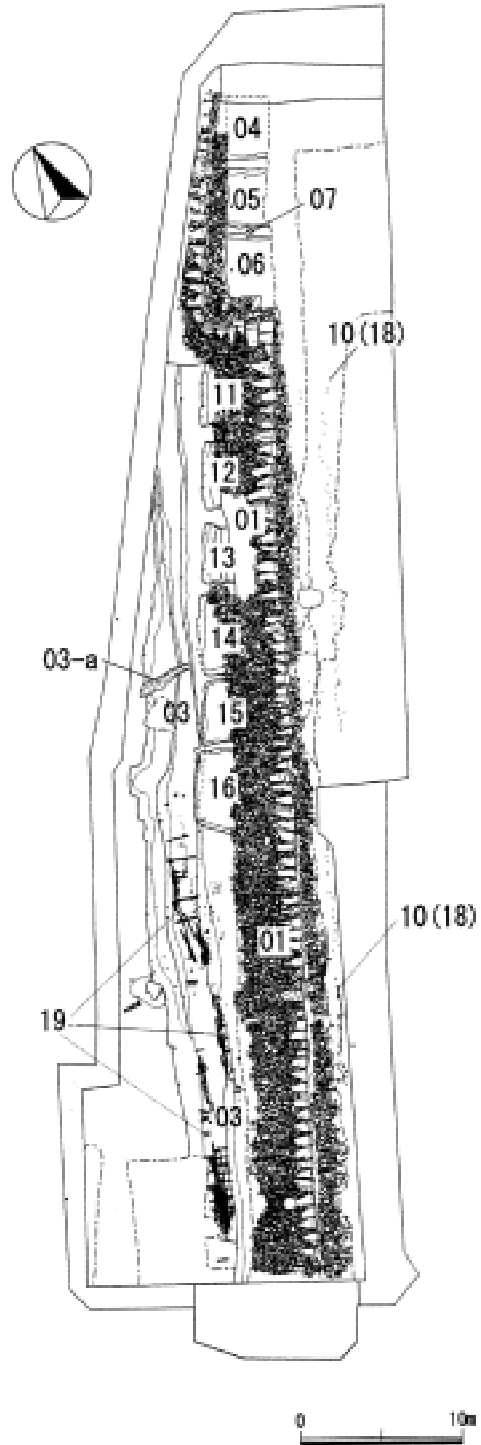


図2 遺跡全体図

外堀石垣

寛永13年修築の石垣で、当時の普請記録「石垣方普請丁場割図」(立花家文書)にほぼ正確に合致する。記録から豊後岡藩中川家、伊予大洲藩加藤家、丹波園部藩小出家、但馬出石藩小出家の担当した丁場にあたる。石垣の遺存していたのは下部の1~4段のみ(上部は明治末年に破壊)であった。

構造的には、下部から、溝状の根切、土台木(胴木状)、築石の順に構築している。土台木および、下部2段の築石は土中となる。

築石の後ろ側には、裏込の栗石および割石が充填され、石垣前面も深さ1m強まで石が詰められている(この部分は土中)。裏込の石材は、荒川や利根川などの川原石と、相模層群の凝灰岩が混在していた。

土台木は前後2列で、主に松材、幅40~50cm、厚さ30cm、長さ5m前後が中心となる。相欠の継手を

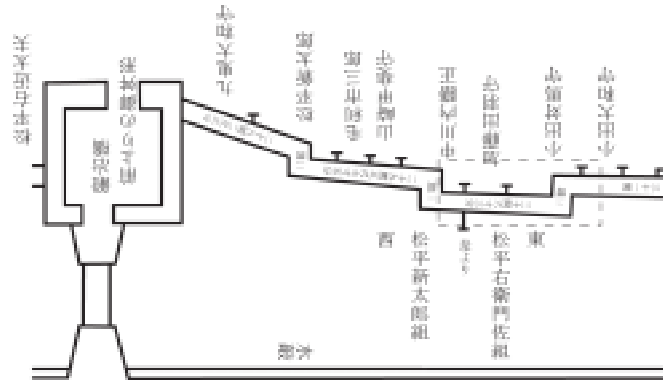


図3 「石垣方普請丁場割図」(部分)

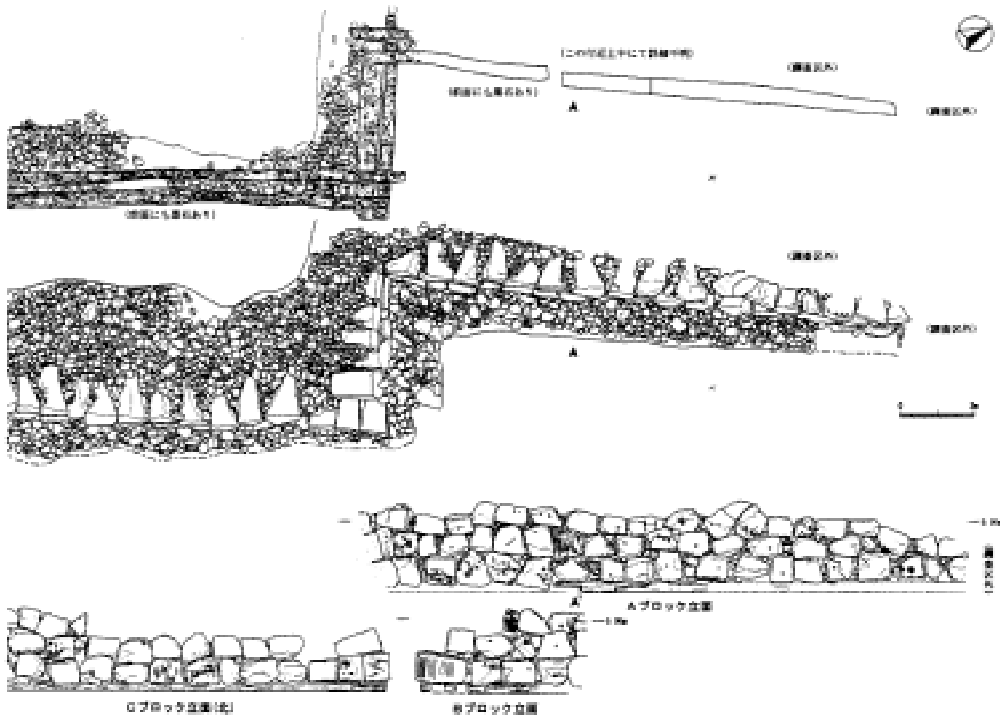


図4 寛永13年の石垣(部分)



写真1 寛永13年の石垣



写真2 園部藩小出家の荷札

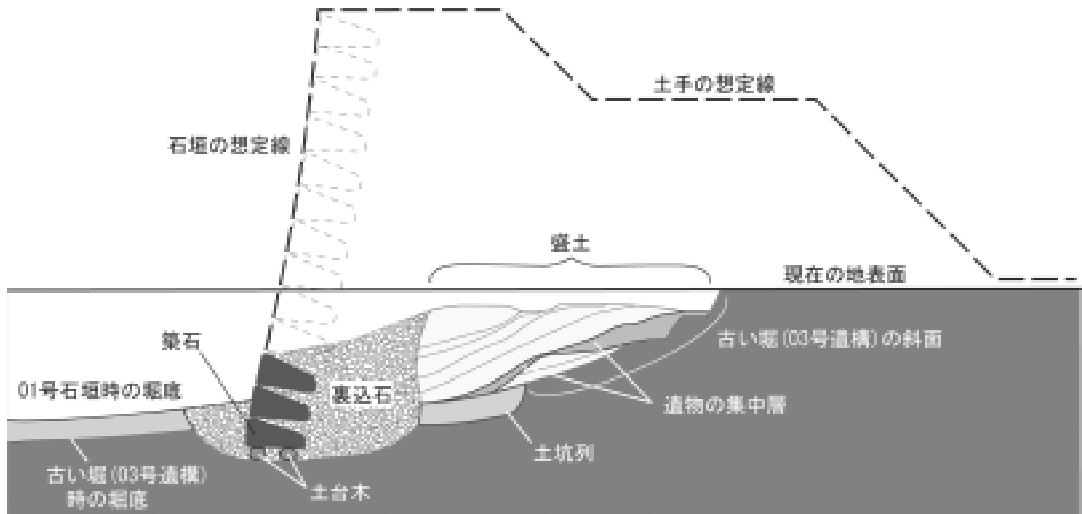


図5 石垣の断面模式図

上下方向に合わせ、杭穴を穿って留める。枕木様のものではない。端部に使用位置などを示す刻印・墨書がみられる。

築石は小口60～80cm、控え長さ130～150cm、重量800～1,200kg前後のものが中心である。大半は伊豆石（安山岩）で、2箇所で見つかった出角（すすみ）の角石（すみいし）のうち、出石藩小出家丁場部分にのみ花崗岩の使用がみられた。園部藩および出石藩小出家の担当丁場では、築石には刻印（「十」「二八」など）が散見された。

石垣以前の外堀跡

石垣の裏から検出された雑壇状の掘り込みである。石垣の掘方に壊され、石垣構築時に斜面に盛土がなされていることから、石垣修築以前の外堀とみられる。

斜面には木片を多量に含む生活ゴミが堆積していた。ゴミの中からは隣接する屋敷に居住していた吉良家の家紋瓦や、園部藩小出家の名を記した荷札が出土している。

堀底には泥土が堆積していたことから水堀であった可能性が高い。

堀斜面検出の土坑列

堀斜面の遺物集中層の下方および、一部石垣の堀底部分から検出された南北3.5～5mほどの方形土坑の列である。計9基が上述の石垣以前の堀に沿って存在する。

覆土は人為的に埋められたものと考えられ、砂層（地山の東京層由来）と灰色粘土層が互層をなしている。遺物はほぼ皆無である。

土坑の境界が畝状をなすという構造から「障子堀」の痕跡の可能性はある。ただし東側が破壊されており、南方ではその列が途切れるなど不自然な部分もあり、確定しがたい。



写真3 旧堀斜面出土遺物

貧乏徳利の回収

寺島 孝一

(当会世話人代表)

式亭三馬の『浮世風呂』前編(文化八年 - 1811)巻之上・朝湯の光景に、
御用は能。御用は能。徳利のお明はござりませんな

とある。三田村鳶魚は「徳利のお明」に註をつけて、「通ひの徳利。貧乏徳利。翌日は小僧が集めに来る」としている。

そこで三馬の他の著作を見てみると例えば、『はやがわりむねのからくり
早変胸機関』(豊国画、文化七年)に、御用が両手に徳利を掲げている図があるし、また『七癖上戸』(国貞画、文化六年)にも同様の図を見ることができる。

さらに、『浮世床』二編の上(文化九年)の挿図には、裏長屋の路地を御用が歩き、門口に徳利が三本おいてある光景が描かれている。これに対応する本文では、

外の方にかやゝと音して入来るは、何曾の者ぞ。只見、軀には柿色染の襦袢衣を穿ち、アレ
見な、酒屋の小二め、何所からか風を引ずつて来ながら覗きにきた。

とある。これらを見れば、明き徳利は、毎朝御用聞きが回収して歩いた場合が多かったことが知られよう。

徳利に指を差し込んで持ち歩いたようすは、川柳にもみることができる。『川柳評万句合』明和四年(1767)九月五日開きに、

両の手に御用八ツ八はさむなり ちらりちらりと々

とあり、同明和五年十一月十五日開きに、

明き徳利御用のゆびになつたやう よくにはなれて々

とある。だから、消費者が往復ともに徳利を掲げて通ったこともあったのだろうが、小僧によるこのような明き徳利の回収方法も、江戸では永く行われていたことがわかるのである。

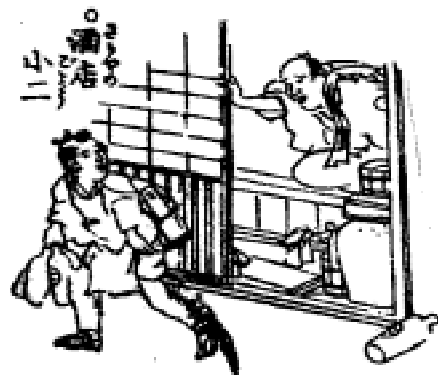


図1 酒屋の御用(小二)



図2 路地に置かれた徳利と御用『浮世床』二編(部分)



図3 明徳利を持つ御用『早変胸機関』

第101回例会のご案内

日 時：2005年7月20日（水）18:30～

内 容：水本和美氏（新宿区歴史博物館）
「江戸のデザイン」（仮題）

会 場：江戸東京博物館 第1学習室
（大階段北側の通路を東に進み、駐車場の
脇を直進し、左側の夜間入口より入る）

交 通：JR 総武線両国駅西口改札 徒歩3分
都営大江戸線両国駅（江戸東京博物館前）
A4出口 徒歩1分

問合せ：東京大学埋蔵文化財調査室
03-5452-5103（寺島・堀内・成瀬）
江戸遺跡研究会公式サイト
<http://www.ao.jpn.org/edo/>

